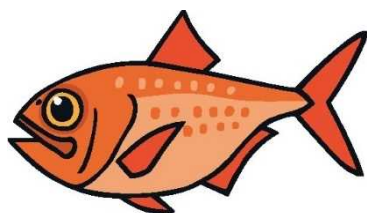


千葉県 沿岸重要水産資源 平成 30 年度資源評価

キンメダイ



- ・ 水深 200~800m の海山や陸棚縁辺部に生息し、県内では銚子沖、勝浦沖、東京湾口漁場で立縄（釣り）により漁獲される。
- ・ 満 2 歳で尾叉長 19cm 体重 180g に達した後、4 歳で 27cm 430g, 10 歳で 35cm 1,050g に達する。
- ・ 産卵期は 6~8 月。

資源評価

銚子沖

水準：中位

動向：増加



勝浦沖

水準：中位

動向：横ばい



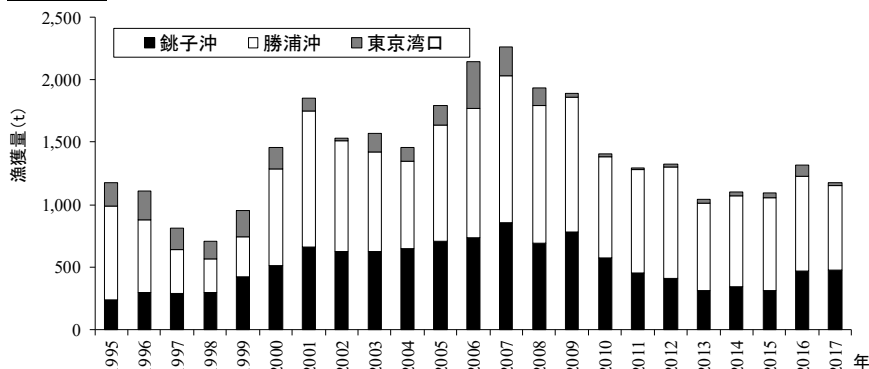
東京湾口

水準：中位

動向：増加



漁獲量



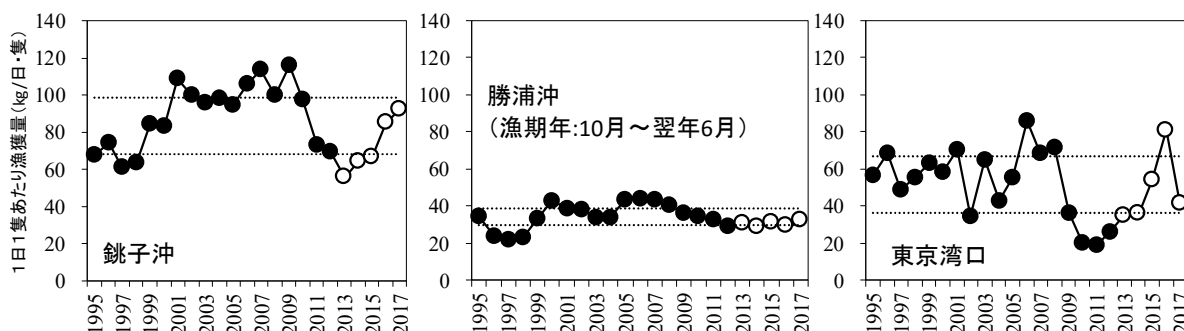
キンメダイの漁場別漁獲量の経年変化 (千葉県調べ)

- ・ 千葉県全体の漁獲量は 1999 年から増加し、2007 年には最大の 2,263t が漁獲された。
- ・ 2007 年以降の漁獲量は各漁場とも減少してきたが、2013 年以降は横ばい傾向にある。

注) 資源水準は、原則過去 20 年以上の評価指標値 (CPUE) から 4 分位により評価した。
資源動向は、最近 5 年間の評価指標の近似式から年間 5%以上の増減の有無により判断した。

資源評価の判断

- ・ 資源水準及び動向は、漁場ごとに 1995 年以降の立縄漁業の CPUE (1 日 1 隻あたりの漁獲量) で判断した。
- ・ 2017 年の資源水準は、銚子沖、勝浦沖、東京湾口では中位水準にある。最近 5 か年の動向は銚子、東京湾口では増加傾向、勝浦沖では横ばいにある。



銚子沖、勝浦沖、東京湾口漁場における立縄漁業による 1 日 1 隻あたり漁獲量の経年変化

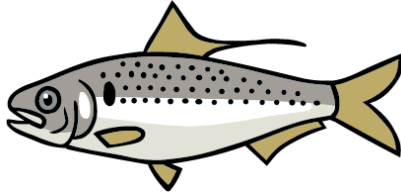
資源管理の取り組み

- ・ 漁場ごとに小型魚の再放流 (銚子沖・勝浦沖全長 25 cm以下、東京湾口全長 22 cm以下)、針数・縄数の制限、休漁日の設定などの自主的な資源管理を実践している。

備考

- ・ 東京湾口漁場では 2009 年以降、漁業者の高齢化等により着業隻数が減少している。
- ・ 国の実施した資源評価では、関東沿岸から伊豆諸島周辺海域における 2016 年の資源水準は低位、動向は減少と判断されている。

コノシロ（東京湾）



- ・ 漁獲のほとんどが東京湾で、中・小型まき網などで漁獲される。
- ・ 産卵期は4～7月で、産卵場は当初は東京湾口部に形成され、次第に湾奥へ広がる。

資源評価

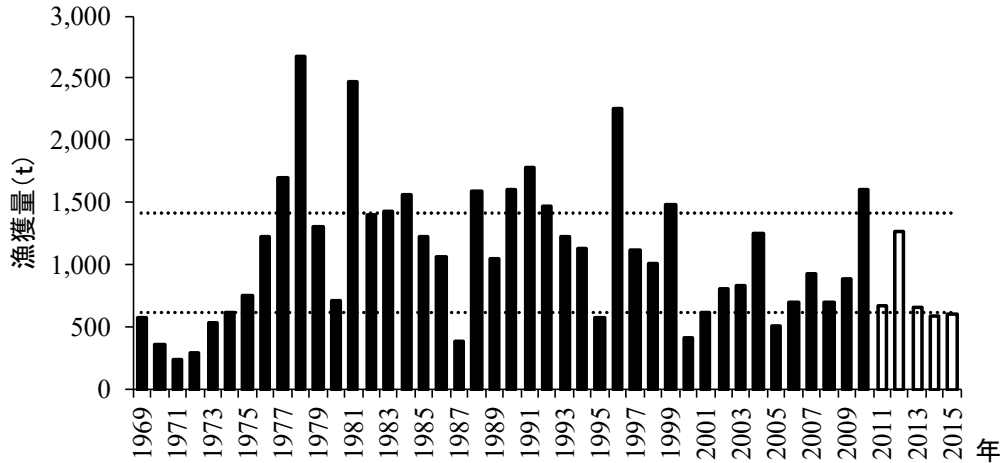
水準：低位



動向：減少



漁獲量



東京湾におけるコノシロの漁獲量の経年変化（農林水産統計年報）

- ・ 東京湾におけるコノシロの漁獲量は年変動が大きく、1978年に2,674tを記録したが、1980年には710tに減少した。近年では2012年に1,263tとなったが、2013～2015年は600t前後で推移している。

注) 資源水準は、原則過去20年以上の評価指標値（漁獲量）から4分位により評価した。
資源動向は、最近5年間の評価指標の近似式から年間5%以上の増減の有無により判断した。

資源評価の判断

- ・ 資源水準及び動向は、1969年以降の東京湾における漁獲量で判断した。
- ・ 長期的に大きく変動する傾向にあるが、2015年における資源水準は低位、2015年までの5か年の資源動向は減少傾向にある。

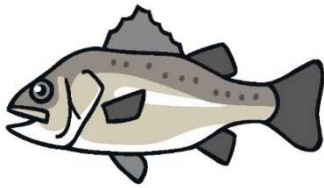
資源管理の取り組み

- ・ 東京湾内において、底びき網では休漁日の設定、操業時間の制限、漁具の制限など、中・小型まき網では冬期に休漁期間を設けるなど、コノシロ以外の魚種も含めて漁業者による自主的な資源管理が行われている。

備考

- ・ 2016年以降の資源水準を東京湾A漁協におけるまき網漁獲量から判断すると、2016年は2015年を上回るが、2017年は大きく減少し、2004年以降で最低の水準になると予想される。

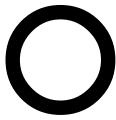
スズキ（東京湾）



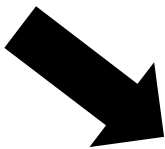
- ・ 漁獲のほとんどが東京内湾・内房海域で，中・小型まき網，小型機船底びき網などで漁獲される（千葉県は全国 1 位）。
- ・ 産卵期は 10 月下旬～3 月上旬で，産卵場は東京湾口部にある。
- ・ 1983 から 1998 年まで種苗放流を実施し，以降休止。

資源評価

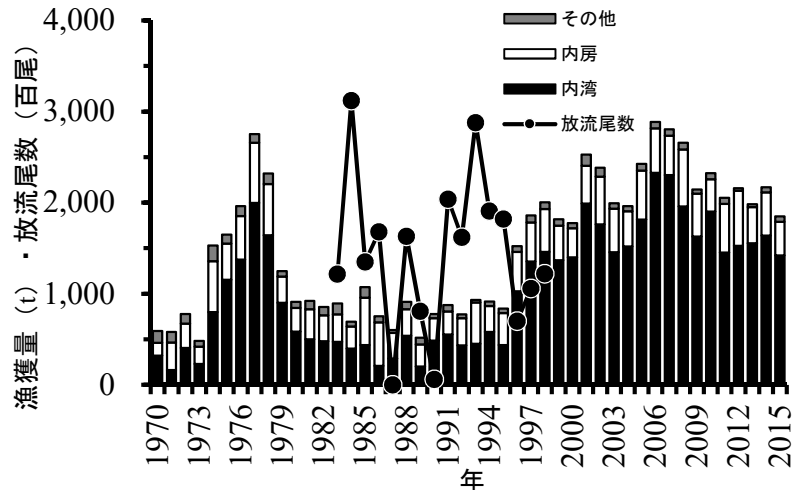
水準：中位



動向：減少



漁獲量



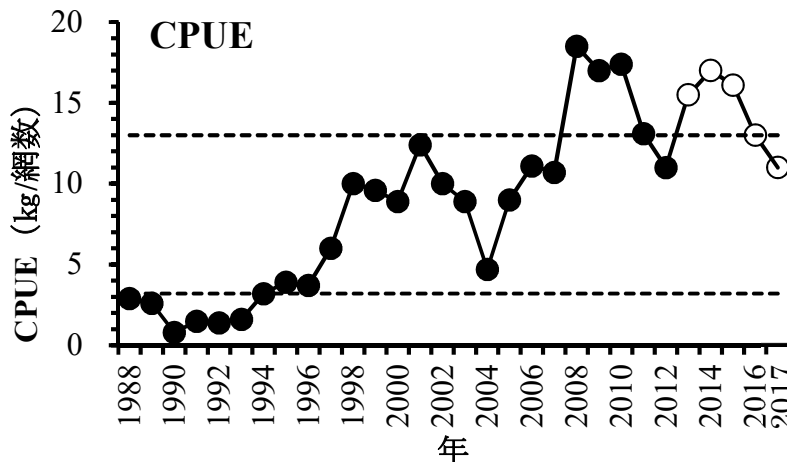
すずき類漁獲量（千葉農林水産統計年報）と放流尾数の経年変化

千葉県におけるすずき類の漁獲量は，1990 年代後半に著しく増加し，近年は 2,000t 前後の漁獲が続いている。

注) 資源水準は、原則過去 20 年以上の評価指標値 (CPUE) から 4 分位により評価した。
資源動向は、最近 5 年間の評価指標の近似式から年間 5%以上の増減の有無により判断した。

資源評価の判断

- ・ 資源水準及び動向は，小型機船底びき網の操業日誌から集計した CPUE（1 網当たりの漁獲量）で判断した。
- ・ 2017 年の資源水準は中位，最近 5 年間の資源動向は減少傾向となった。

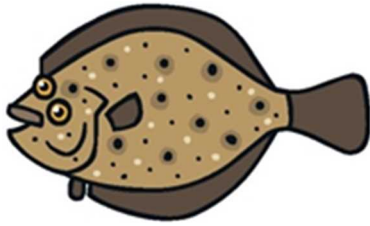


小型機船底びき網の標本漁船によるスズキの 1 網当たり漁獲量 (kg/網；CPUE) の経年変化

資源管理の取り組み

- ・ 東京湾においては，底びき網で休漁日の設定，操業時間の制限，漁具の制限など，まき網で冬期の休漁期間の設定など，漁業者による自主的な資源管理が行われている。

ヒラメ



- ・ 砂浜域に生息し、銚子～富津の沿岸で小型機船底びき網，刺網，定置網などにより漁獲される。
- ・ 1歳で全長35cm，2歳で45cm 体重1kgに成長し，3歳以降は雌雄差が拡大し，5歳では雄が60cm 体重2.3kg に対して雌では70cm 体重3.9kgに達する。
- ・ 産卵期は3～6月。
- ・ 1982年から種苗放流を実施。

資源評価

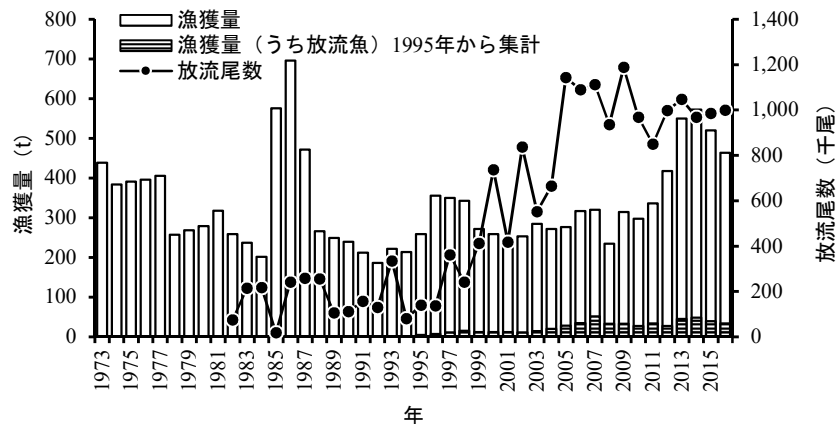
水準：高位



動向：横ばい



漁獲量



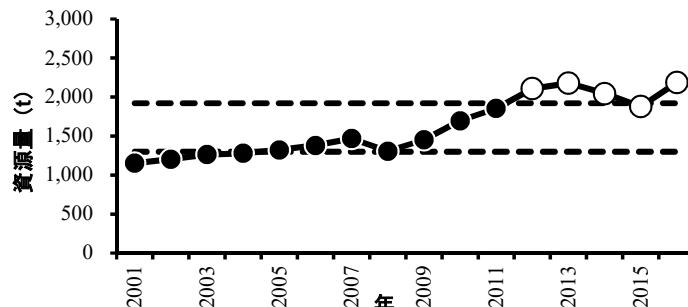
千葉県におけるヒラメ漁獲量（千葉農林水産統計年報）と放流尾数の経年変化

1973年以降200～400tで推移し，1985～1987年には漁獲量が一時的に増加した。近年の漁獲量は増加傾向にあり，2016年は464t 漁獲された。

注) 資源水準は、原則過去20年以上の評価指標値(資源量)から4分位により評価した。
資源動向は、最近5年間の評価指標の近似式から年間5%以上の増減の有無により判断した。

資源評価の判断

- ・ 資源水準及び動向は，漁獲物測定，漁獲統計の資料から推定される資源量で判断した。
- ・ 2016年の資源水準は最近16年間の中では高位，最近5年間の資源動向は横ばい傾向となった。

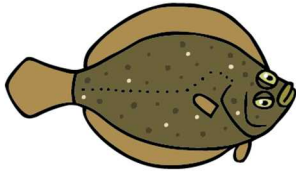


千葉県におけるヒラメ資源量の経年変化

資源管理の取り組み

- ・ 小型魚（全長30cm未満，底びき網は25cm未満）の再放流，刺網の設置時間制限，県も一体となって実施している種苗放流など漁業者による自主的な資源管理が行われている。

マコガレイ (東京湾)



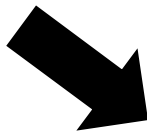
- ・ 東京湾においては、内湾から内房海域で、小型機船底びき網、刺網で漁獲される。
- ・ 産卵期は冬季で、湾奥、神奈川県沿岸、内房などに産卵場があり、湾奥が主産卵場と考えられている。
- ・ 1991 年から種苗放流が行われている。

資源評価

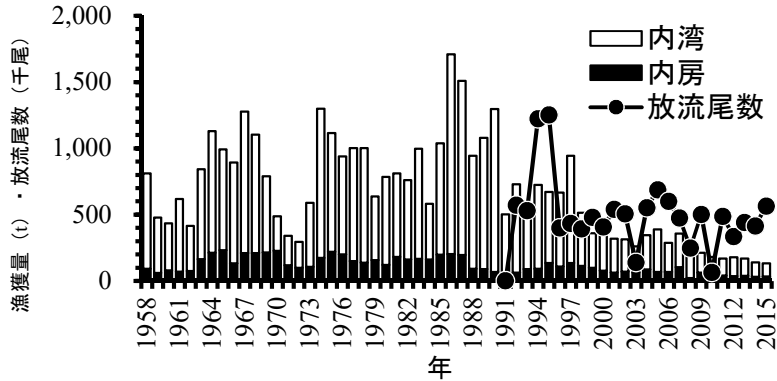
水準：低位



動向：減少



漁獲量



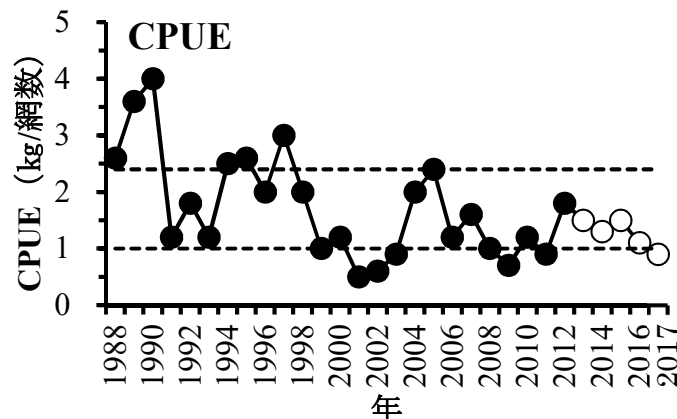
かれい類漁獲量 (千葉農林水産統計年報) と放流尾数の経年変化

東京湾におけるかれい類の漁獲量は、1970 年代まではイシガレイ主体で、その後、マコガレイ主体となった。長期的には減少傾向にあり、1980 年代後半から 1990 年までは 1000t を超える水揚げがみられていたが、近年は 200t を下回っており、低迷している。

注) 資源水準は、原則過去 20 年以上の評価指標値 (CPUE) から 4 分位により評価した。
資源動向は、最近 5 年間の評価指標の近似式から年間 5%以上の増減の有無により判断した。

資源評価の判断

- ・ 資源水準及び動向は、小型機船底びき網の操業日誌から集計した CPUE (1 網当たりの漁獲量) で判断した。
- ・ 2017 年の資源水準は低位、最近 5 年間の資源動向は減少傾向となった。

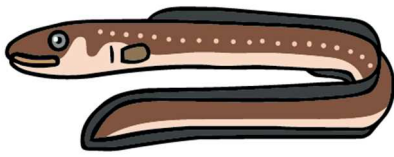


小型機船底びき網の標本漁船によるマコガレイの 1 網当たり漁獲量 (kg/網 ; CPUE) の経年変化

資源管理の取り組み

- ・ 内湾の底びき網では、休漁日の設定及び漁具の制限による漁獲圧の抑制・産卵期の保護、県との稚魚分布調査、稚魚の保護のための禁漁区設定など、漁業者による自主的な資源管理が行われている。また、1991 年から県による種苗放流が行われている。

マアナゴ



- ・ 東京湾においては、あなご筒、小型機船底びき網で、銚子・九十九里においては、沖合底びき網、小型機船底びき網、延縄で漁獲される。
- ・ 産卵場は、沖ノ鳥島南方の九州ーパラオ海嶺上で、葉形仔魚（通称：のれそれ）が日本沿岸に来遊する。

資源評価

東京湾

水準：低位



動向：不明（※）



※近年の資源水準は極めて低水準であり、現在、集計対象の標本漁船ではマアナゴを目的とした操業がほとんど行われていないことから、最近 5 年間の 1 網当たり漁獲量の変化は資源動向を的確に表していない可能性があり、不明とした。

銚子・九十九里

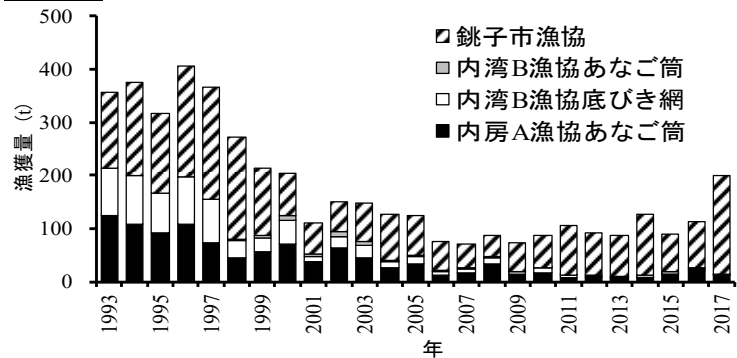
水準：中位



動向：減少



漁獲量



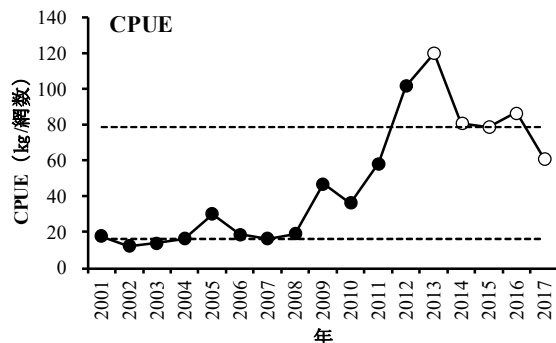
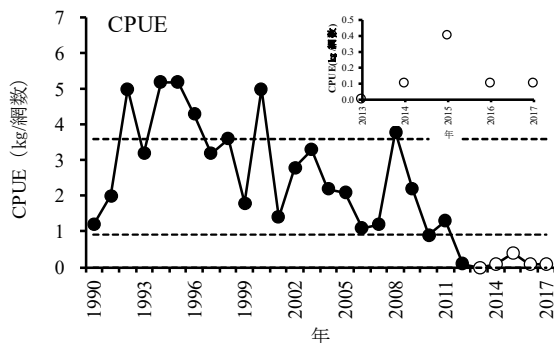
県内主要 3 漁協のマアナゴ漁獲量（千葉県調べ）

千葉県内の主要 3 漁協におけるマアナゴの漁獲量は、1990 年代以降減少傾向で、近年は東京湾内湾、内房は極めて低い水準であるのに対して、銚子・九十九里では 70 ~ 180 トンで増加傾向にある。

注) 資源水準は、原則過去 20 年以上の評価指標値 (CPUE) から 4 分位により評価した。
資源動向は、最近 5 年間の評価指標の近似式から年間 5%以上の増減の有無により判断した。

資源評価の判断

- ・ 資源水準及び動向は、小型機船底びき網（東京湾）又は沖合底びき網（銚子・九十九里）の操業日誌から集計した CPUE（1 網当たりの漁獲量）で判断した。
- ・ 2017 年の資源水準、最近 5 年間の資源動向は、東京湾では低位、不明（※）、銚子・九十九里では中位、減少傾向となった。



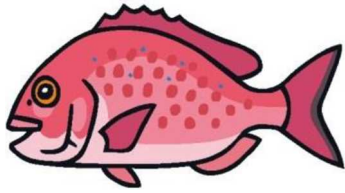
東京湾における小型機船底びき網の標本漁船によるマアナゴの 1 網当たり漁獲量の経年変化

銚子地区における沖合底びき網の標本漁船によるマアナゴの 1 網当たり漁獲量の経年変化

資源管理の取り組み

- ・ 東京湾においては、小型機船底びき網で休漁日の設定、操業時間の制限及び漁具の制限、あなご筒で水抜き穴の拡大による小型魚の保護など、銚子・九十九里においては、小型機船底びき網で改良漁具導入による小型魚の保護など、漁業者による自主的な資源管理が行われている。

マダイ



- ・ 海底が起伏に富んだ岩盤または砂礫質の水域に生息し、銚子～富津の沿岸で小型機船底びき網、刺網、定置網、釣りなどにより漁獲される。
- ・ 1歳で尾叉長 16cm, 2歳で 24cm に成長し, 4歳で 37cm となつて体重は 1kg を上回り, 6歳で 2kg を超える。
- ・ 産卵期は 3～6 月。
- ・ 1980 年から種苗放流を実施。

資源評価

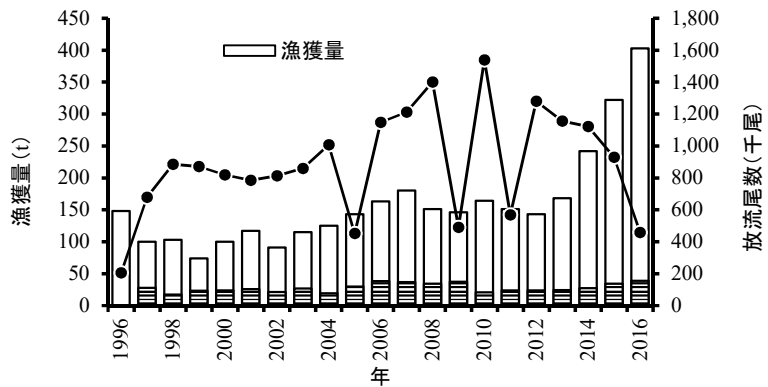
水準：高位



動向：増加



漁獲量



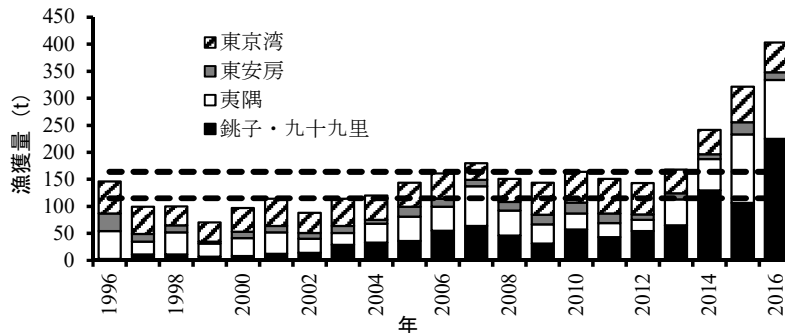
千葉県におけるマダイ漁獲量（千葉農林水産統計年報）と放流尾数の経年変化

1999 年に 74t まで減少したが、それ以降は増加に転じ、2008 年以降は 150t 前後で安定して推移した。2014 年以降大きく増加する傾向にあり、2016 年は 403t の漁獲となった。

注) 資源水準は、原則過去 20 年以上の評価指標値（漁獲量）から 4 分位により評価した。
資源動向は、最近 5 年間の評価指標の近似式から年間 5%以上の増減の有無により判断した。

資源評価の判断

- ・ 資源水準及び動向は、漁獲量の推移で判断した。
- ・ 2016 年の資源水準は高位、最近 5 年間の資源動向は増加傾向となった。



マダイの海域別漁獲量の経年変化

資源管理の取り組み

- ・ 小型魚（全長 20cm 以下）の再放流、県も一体となって実施している種苗放流など漁業者による自主的な資源管理が行われている。

クロアワビ



- ・ 沿岸の岩礁域に生息し（メガイアワビより浅い）、主に外房地区で素潜りにより漁獲される。
- ・ 4～5 歳で制限殻長の 12 cm(230g 前後)に達する。
- ・ アワビ類の産卵期は 10 月～翌年 1 月。
- ・ 1968 年からアワビ類の種苗放流が行われている。近年の一般漁場における混入率(過去 5 年平均)は 1～22% (※1)。

※1 漁獲物調査を実施している千倉 2 地区、鴨川 1 地区、勝浦 1 地区の 2013 年～2017 年の平均。

資源評価

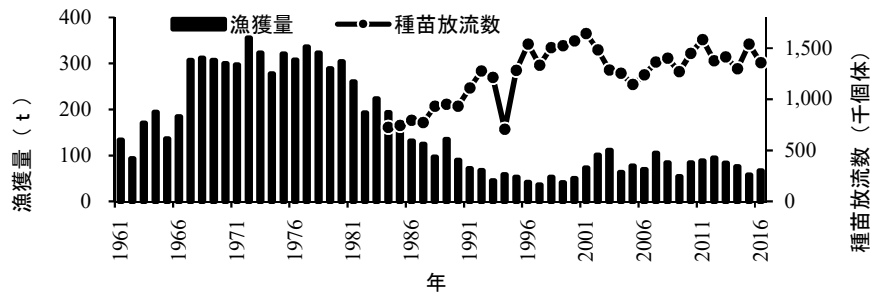
水準：高位 (※2)



動向：横ばい



漁獲量



クロアワビ漁獲量 (千葉県調べ) 及び種苗放流数 (栽培漁業種苗生産、入手・放流実績 (全国)) の経年変化

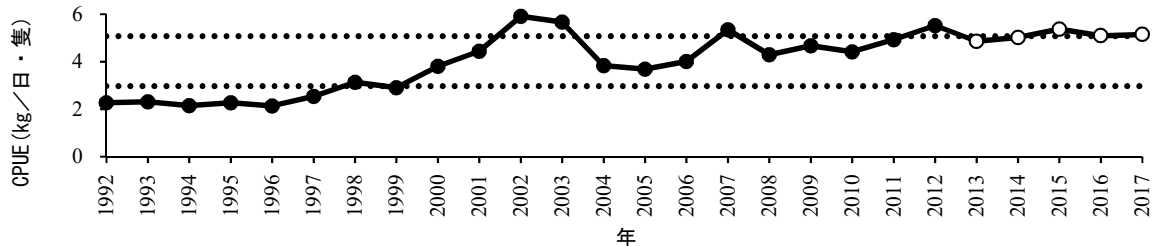
- ・ 最大は 1972 年の 355 t。
- ・ 最小は 1997 年の 35 t。
- ・ 2016 年は 66 t。

注) 資源水準は、原則過去 20 年以上の評価指標値 (CPUE) から 4 分位により評価した。
資源動向は、最近 5 年間の評価指標の近似式から年間 5%以上の増減の有無により判断した。

資源評価の判断

- ・ 資源水準及び動向は主要地区一般漁場の素潜り漁業の CPUE (1 日 1 隻当たりの漁獲量) で判断した。
- ・ 2017 年の資源水準は最近 26 年間の高位 (※2)。最近 5 年間の資源動向は横ばい傾向であった。

※2 評価期間内のデータから判断される資源状況は「高位」であるが、それ以前の資源水準 (CPUE) は漁獲状況等から現在を上回っていたものと考えられる。



クロアワビ主要地区一般漁場素潜り漁業 CPUE の経年変化

資源管理の取り組み

- ・ 千葉県海面漁業調整規則で制限殻長 (12 cm 以下のものは採捕してはならない) と禁漁期間 (9/16～3/31) が定められている。
- ・ 漁法の制限, 操業時間の制限, 種苗放流, 密漁対策, 禁漁区漁場の輪採制の導入及び稚貝保護区の設定等, 漁業者による自主的な資源管理や増産活動が行われている。

メガイアワビ

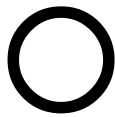


- ・ 沿岸の岩礁域に生息し（クロアワビより深い）、主に外房地区で素潜りにより漁獲される。
- ・ 4～5 歳で制限殻長の 12 cm(210g 前後)に達する。
- ・ アワビ類の産卵期は 10 月～翌年 1 月。
- ・ 1968 年からアワビ類の種苗放流が行われている。近年の一般漁場における混入率(過去 5 年平均)は 0～12% (※1)。

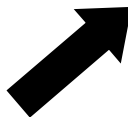
※1 漁獲物調査を実施している千倉 2 地区、鴨川 1 地区、勝浦 1 地区の 2013 年～2017 年の平均。

資源評価

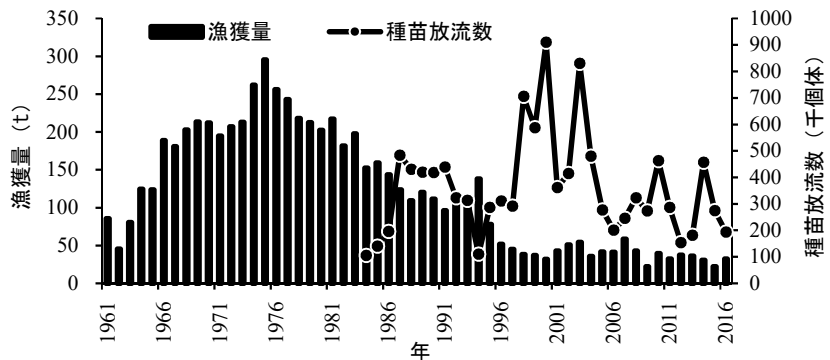
水準：中位



動向：増加



漁獲量



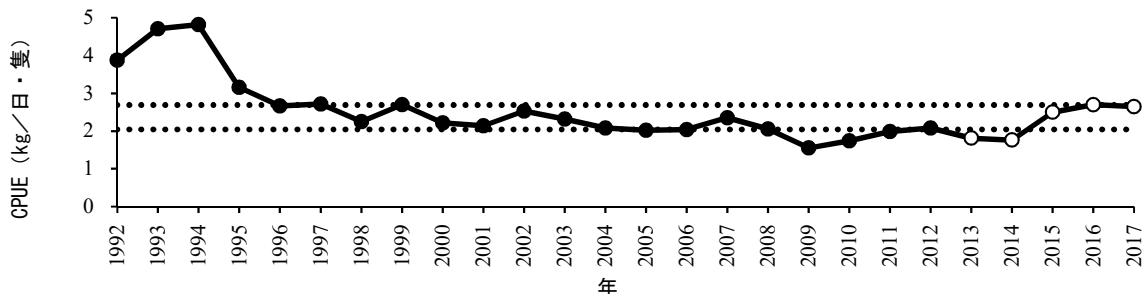
メガイアワビ漁獲量 (千葉県調べ) 及び種苗放流数 (栽培漁業種苗生産、入手・放流実績 (全国)) の経年変化

- ・ 最大は 1975 年の 295 t。
- ・ 最小は 2009 年の 22 t。
- ・ 2016 年は 32 t。

注) 資源水準は、原則過去 20 年以上の評価指標値 (CPUE) から 4 分位により評価した。
資源動向は、最近 5 年間の評価指標の近似式から年間 5%以上の増減の有無により判断した。

資源評価の判断

- ・ 資源水準及び動向は主要地区一般漁場の素潜り漁業の CPUE (1 日 1 隻当たりの漁獲量) で判断した。
- ・ 2017 年の資源水準は最近 26 年間の中位。最近 5 年間の資源動向は増加傾向となった。



メガイアワビ主要地区一般漁場素潜り漁業 CPUE の経年変化

資源管理の取り組み

- ・ 千葉県海面漁業調整規則で制限殻長 (12 cm 以下のものは採捕してはならない) と禁漁期間 (9/16～3/31) が定められている。
- ・ 漁法の制限, 操業時間の制限, 種苗放流, 密漁対策及び稚貝保護区の設定等, 漁業者による自主的な資源管理が行われている。

サザエ



- ・ 沿岸の岩礁域に生息し、主に内房～外房地区で刺網、見突き、素潜りにより漁獲される。
- ・ 3～4 歳で制限殻高の 7 cm(90g 前後)に達する。
- ・ 産卵期は 5～9 月。

資源評価

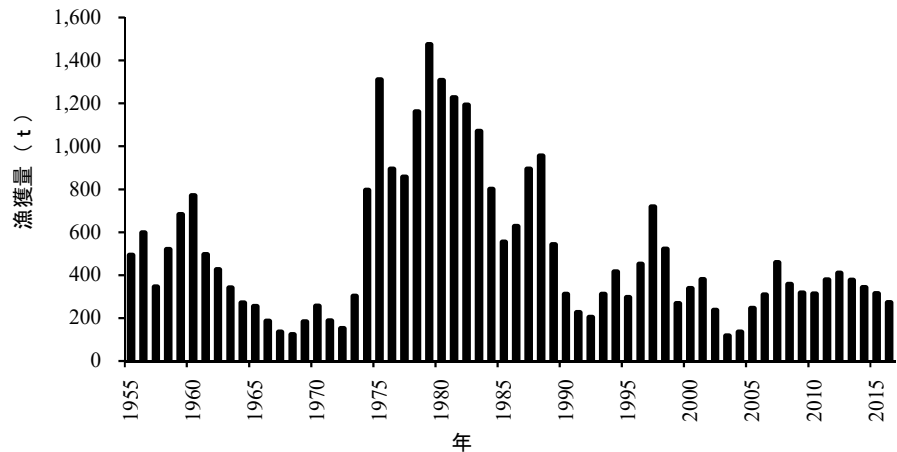
水準：高位



動向：横ばい



漁獲量



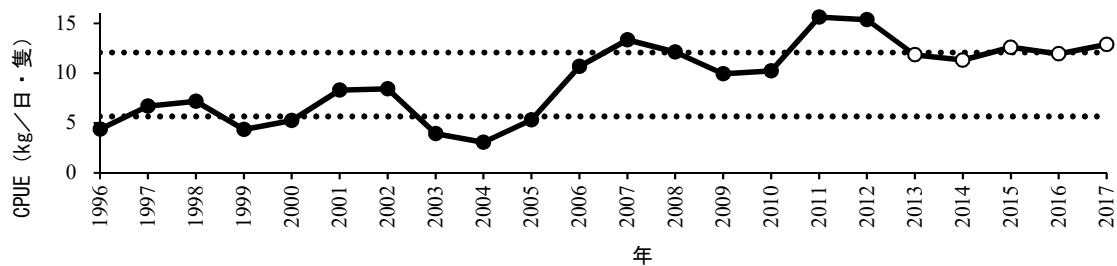
サザエ漁獲量 (千葉農林水産統計年報) の経年変化

- ・ 最大は 1979 年の 1474 t。
- ・ 最小は 2003 年の 116 t。
- ・ 2016 年は 271 t。

注) 資源水準は、原則過去 20 年以上の評価指標値 (CPUE) から 4 分位により評価した。
資源動向は、最近 5 年間の評価指標の近似式から年間 5%以上の増減の有無により判断した。

資源評価の判断

- ・ 資源水準及び動向は主要地区の刺網漁業の CPUE (1 日 1 隻当たりの漁獲量) で判断した。
- ・ 2017 年の資源水準は最近 22 年間の高位。最近 5 年間の資源動向は横ばい傾向となった。



サザエ主要地区刺網漁業 CPUE の経年変化

資源管理の取り組み

- ・ 千葉県海面漁業調整規則で制限殻高 (7 cm 以下のものは採捕してはならない) と禁漁期間 (6/1～6/30) が定められている。
- ・ 1994 年以降、海区漁業調整委員会指示により 7/1～7/31 は原則採捕禁止とされている。

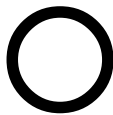
ダンベイキサゴ



- ・ 外海に面した砂浜海岸に生息し、九十九里では貝けた網、鋤簾（じょれん）により、鴨川ではろくろ曳き（人力による底びき網）により漁獲される。
- ・ 1歳で殻径約1.2cm、2歳で2.3cmに成長し、3歳で3.0cmとなり、寿命は5年以上と考えられ、3.5cmを超えるものも漁獲される。
- ・ 産卵期は4～6月、11～1月。

資源評価

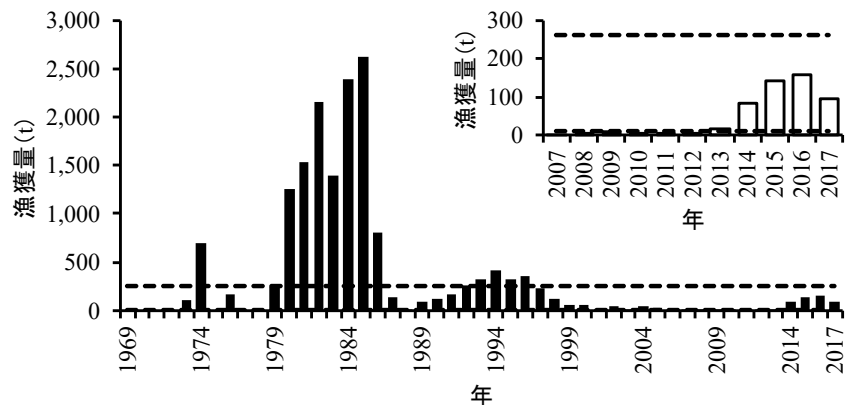
水準：中位



動向：増加



漁獲量



ダンベイキサゴ漁獲量の経年変化（千葉県調べ）

- ・ 1970年代は、1974年を除き低位から中位で推移していたが、1980年代には1,000 t以上に増加し、1986年まで高位で推移していた。
- ・ 1988年には10 tまで減少したが、再び増加し、1994年には400 t以上の漁獲があった。その後再び減少がみられ、2012年まで低位で推移していたが、2014年以降増加し、2016年は150 t以上漁獲された。

注) 資源水準は、原則過去20年以上の評価指標値(漁獲量)から4分位により評価した。
資源動向は、最近5年間の評価指標の近似式から年間5%以上の増減の有無により判断した。

資源評価の判断

- ・ 資源水準及び資源動向は、漁獲量の推移で判断した。
- ・ 2017年の資源水準は中位、最近5年間の資源動向は増加傾向となった。

資源管理の取り組み

- ・ 貝けた網漁業では操業隻数及び日数の制限など、漁業者が自主的な資源管理に取り組んでいる。

チョウセンハマグリ



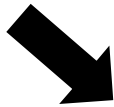
- ・ 外海に面した砂浜海岸に生息し、九十九里では貝けた網、鋤簾（じょれん）により、鴨川ではろくろ曳き（人力による底びき網）により漁獲される。
- ・ 1歳で殻長約1cm、2歳で3~4cm（7~16g）に成長し、3歳で5~6cm（31~54g）となり、寿命は10年以上で10cm（250g）を超えるものも漁獲される。
- ・ 産卵期は6~9月。

資源評価

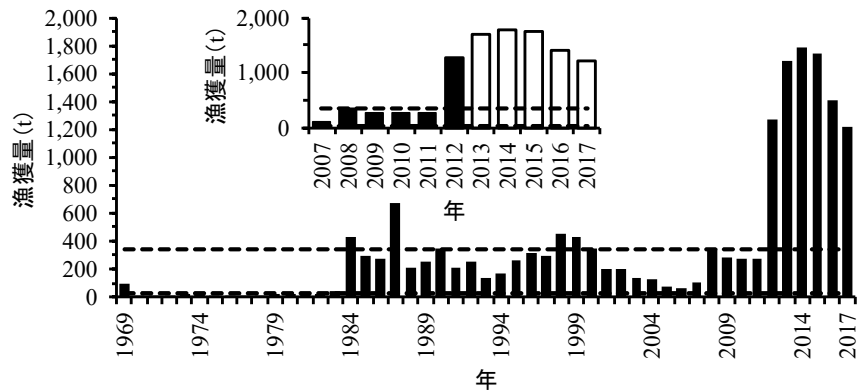
水準：高位



動向：減少



漁獲量



チョウセンハマグリ漁獲量の経年変化

(2006年まで千葉農林水産統計年報, 2007年から千葉県調べ)

- ・ 1969~1983年は低位で推移していたが、1984年以降は70~660tで増減を繰り返し、2012年以降1,000t以上の漁獲が続いている。
- ・ 2012年以降は、2009年生まれの卓越年級群の加入により漁獲が増加したと考えられる。

注) 資源水準は、原則過去20年以上の評価指標値(漁獲量)から4分位により評価した。
資源動向は、最近5年間の評価指標の近似式から年間5%以上の増減の有無により判断した。

資源評価の判断

- ・ 資源水準及び資源動向は、漁獲量の推移で判断した。
- ・ 2017年の資源水準は高位、最近5年間の資源動向は減少傾向となった。

資源管理の取り組み

- ・ 資源保護区域の設定に加え、貝けた網漁業では網目、操業隻数及び日数の制限、漁獲サイズの大型化、腰まき漁業（鋤簾を用いる漁業）では禁漁期の設定など、漁業者が自主的な資源管理に取り組んでいる。

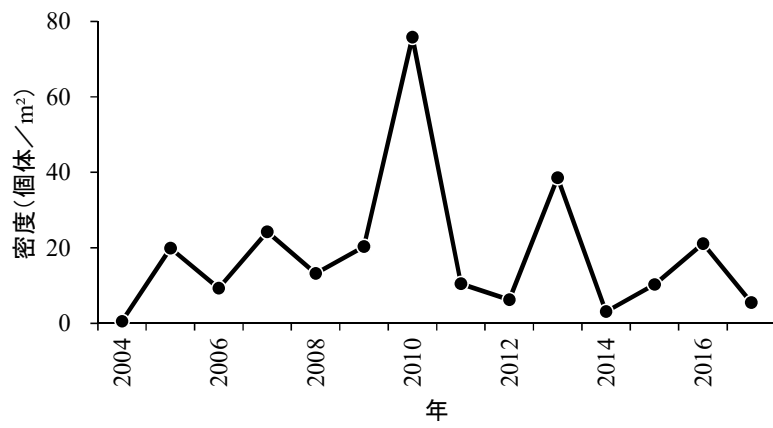


図 九十九里海域における1歳貝平均分布密度の経年変化

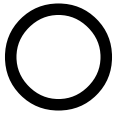
イセエビ



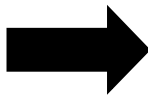
- ・ 沿岸の岩礁域に生息し、主に外房地区で刺網により漁獲される。
- ・ 3歳で制限体長の13 cm(80g 前後)に達する。
- ・ 産卵期は5~9月。

資源評価

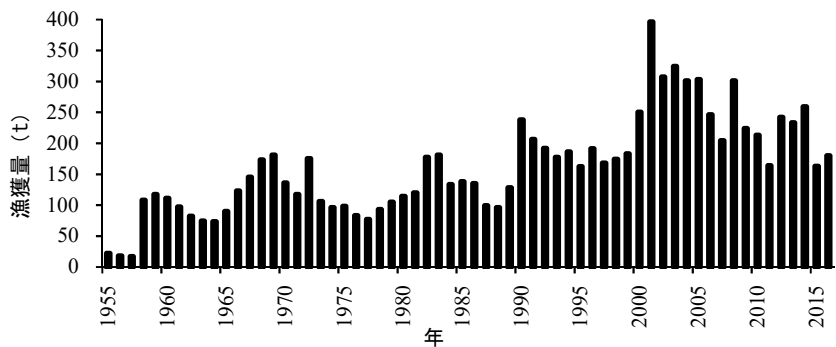
水準：中位



動向：横ばい



漁獲量



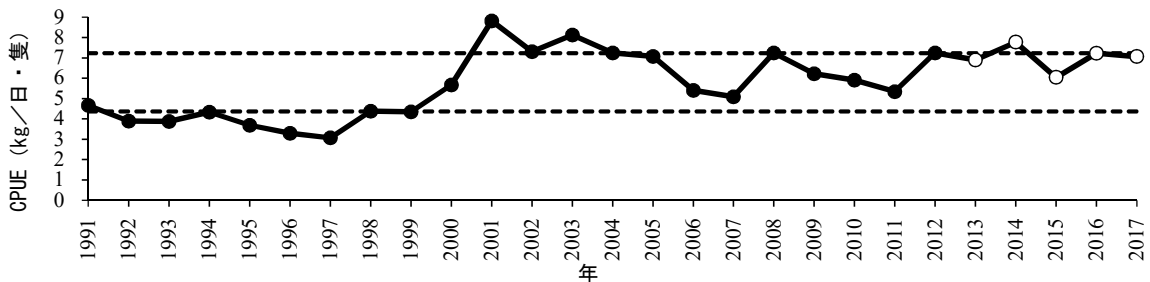
イセエビ漁獲量 (千葉農林水産統計年報) の経年変化

- ・ 1955年以降緩やかな増加傾向にあったが、2001年の396 tを最大に、それ以降は減少傾向にある。
- ・ 2016年は180 t。

注) 資源水準は、原則過去20年以上の評価指標値 (CPUE) から4分位により評価した。
資源動向は、最近5年間の評価指標の近似式から年間5%以上の増減の有無により判断した。

資源評価の判断

- ・ 資源水準及び動向は主要地区刺網漁業のCPUE (1日1隻当たりの漁獲量) で判断した。
- ・ 2017年の資源水準は最近27年間の中位。最近5年間の資源動向は横ばい傾向となった。



イセエビ主要地区刺網漁業 CPUE の経年変化

資源管理の取り組み

- ・ 千葉県海面漁業調整規則で制限全長 (13 cm 以下のものは採捕してはならない) と禁漁期間 (6/1~7/31) が定められている。
- ・ 漁具 (反数) の制限, 操業時間の制限, 小型個体の再放流等, 漁業者による自主的な資源管理が行われている。

マダコ（外房）



- ・ 漁獲の多くは外房で、たこつぼ、沖合底曳網などで漁獲される。
- ・ 地先に生息する群と、広く回遊する群が存在する。漁獲盛期は12月～4月。

資源評価

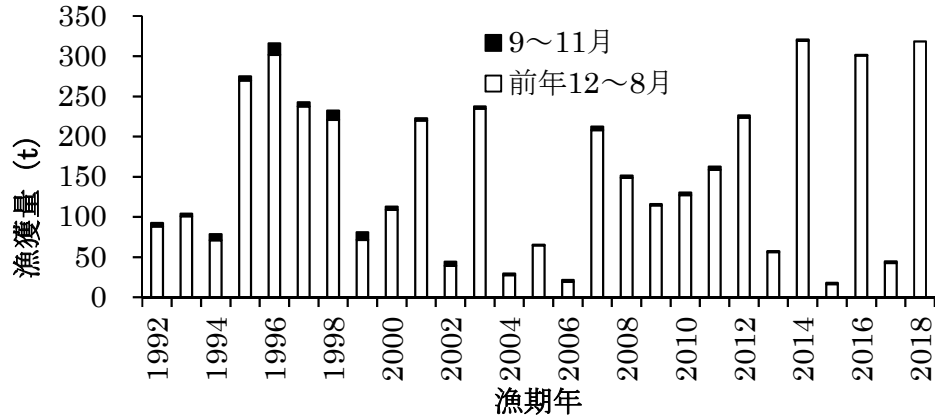
水準：高位



動向：横ばい



漁獲量



千葉県主要港におけるマダコ漁期年別漁獲量の経年変化

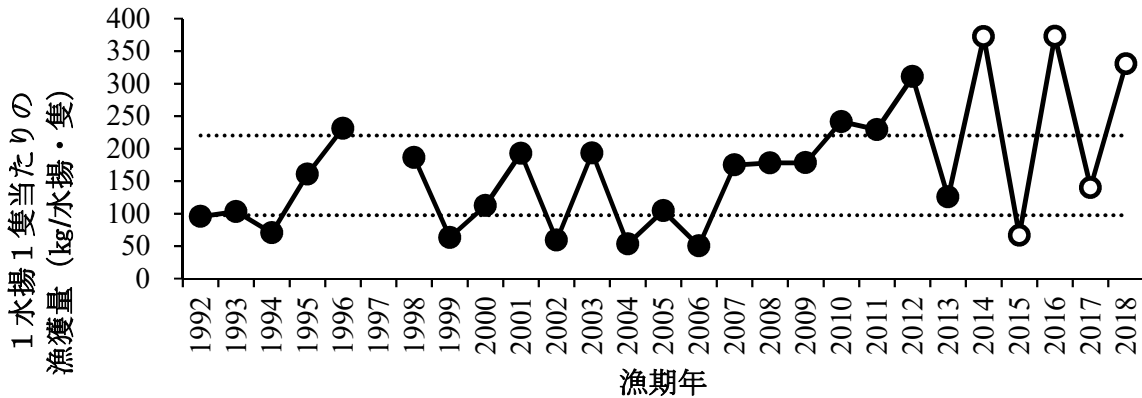
(千葉県調べ。年は漁期年：前年12月～11月。2018年は8月まで)

- ・ 千葉県全体の漁獲量は年ごとに大きく変動している。
- ・ 漁獲量は資源量その他、海況による回遊経路や時期の変動、茨城県以北の漁獲量等に影響を受けて変動すると考えられる。

注) 資源水準は、原則過去20年以上の評価指標値(CPUE)から4分位により評価した。
資源動向は、最近5年間の評価指標の近似式から年間5%以上の増減の有無により判断した。

資源評価の判断

- ・ 資源水準及び動向は、外房 A 漁協におけるたこつぼ漁業の1992年以降のCPUE(1水揚1隻当たりの漁獲量)で判断した。
- ・ 変動が激しいが、2018年の資源水準は高位、最近5年間の資源動向は横ばい。



外房 A 漁協のたこつぼ漁業の CPUE (1水揚1隻当たりの漁獲量) の経年変化

※ 年は漁期年(前年12月～8月)、1997年は隻数データ不明のため欠測。

資源管理の取り組み

- ・ たこつぼ漁業の漁業許可方針で、海域ごとに操業隻数・期間が定められている。

資源評価基準の詳細（資源評価票の各項目）

（1）評価基準

- ①評価指標 資源量、CPUE、漁獲量の順に用いる。
- ②資源水準は、4分位により評価し、第1分位数以下を「低位」、第1分位数から第3分位数までを「中位」、第3分位数以上を「高位」とする。
- ③資源動向は、最近5年間の評価指標の近似式から、年間5%以上の増加を「増加」、5%以上の減少を「減少」、5%未満の増加又は5%未満の減少を「横ばい」、動向の判断ができない場合は「不明」とする。

なお、漁獲が低迷する魚種については、資源評価の指標値の振れ幅が大きく、増加傾向になりやすいことなどから、計算上で「増加」となった場合においても、判断が難しい場合は「不明」を用いることとし、加えて説明を記載する。

（2）資源水準のマーク

高位 ◎
中位 ○
低位 △

（3）資源動向のマーク

増加 ↗
横ばい →
減少 ↘
不明 —